

# 僑友會之報

54號



1967



## 林重憲先生ご一家

(前列左より)林先生、令夫人

繁様(長男)、和憲様(孫)、晃様(孫)、繁様夫人

(後列左より)博様(三男)、讓様(四男)、一枝様(長女)

鉄教様(五男)

### 目次

一、人生函数の根は一つ……	(1)
一、懐想……	大森 丙 (2)
一、無題……	真崎尚忠 (3)
一、戦争と平和……	古田正康 (6)
一、林重憲先生退官	上林 明 (7)
一、記念行事……	
一、並びに関西支部総会……	(8)
一、中国支部総会……	(9)
一、中部支部総会……	(10)
一、東京支部総会……	(11)
一、四国支部総会……	(11)
一、北陸支部総会……	(11)
一、九州支部総会……	(12)
一、北海道支部総会……	(12)
一、東北支部総会……	(12)
一、昭二会同総会……	(13)
一、編集後記……	(13)
一、電気評論	
復刊について……	(14)



世に羊頭肉という言があるが、私は茲

に敢て之を地で行くことにした。実は私の言わんとするところは絶対的運命論である。然しこんな表題では会員諸君が頭から馬鹿にして一顧も与えて呉れないと思つてこんな表題にした。

扱て、本論に入るが私は京都大学在学中に時折人生ということに就て考えた末、人の運命なるものは如何なる方法によつても之を變更することは出来ない即ち運命は絶対不変のものなりという結論に到達した。而して今でも其の信念は変わらない。

人の運命は其生れ落ちる時、否それ以前母の体内に其芽を発した時、或はそれ以前から既に決定していて息を引きとる迄其コースは確定して他から如何なる力を出してしても之を變更することは出来ないものである。即ち人生のコースは分岐点のない一本の軌道に乗って進む玉ころがしのようなもので自分の意志でも或は他からの力を加えても絶対に變更出来ないものであると信するに至つた。数学的に言えば人生のコースはタイムを唯一の変数としたる特種の函

数で示さる而して其の根たるや一つしかないものである。一生の間に人の踏み残した軌跡は一つの曲線となる。私は之を人生曲線と名づける。而して之が所謂人生函数である。扱て、この函数の変数たるタイムは一瞬たりとも止ることを許さず、また後退することも出来ないからある時点である時に斯うして居たらなど悔んで見ても根が一つしかない函数の曲線だから一つの瞬間に対しては他の答は決して出て来ない。然し自己反省によつて其の時から将来に向つては進むべき道を変えることは不可能

### 人生函数の根は一つ

大 森 丙

ではない。即ち其の新しい道は過去の道から急に變化することはある。然し其の變化たるや其の人の生れ出る以前から既に其の時点に來れば人生曲線がアブラプトチェンジをするよう予め決定されていたもので其の時点に於て初めて発生したものでは更々ない。斯様に見て來る時は人間の一生は誠に無味乾燥なもので、人間としての価値などないではないか。即ち如何に優れた業績を残した人も極悪な道を踏んだ人も全く其の差異を認めぬこととなるではないかとの反論が出るかも知れぬ。此の論に對して私は全面的に賛意を表する。

私の考えでは元來人生に価値などというものを与え、又は期待するのが間違っている。又人間が高遠な理想を持って生れて來たなどと言うのも間違っている。其の理由は進むべき道が決して人間は只其の与えられた軌道を一途に転がって行く一個の玉に外ならぬからであるから其の玉には全然自己の意志なるものがある筈がない。従つて責任はない筈である。即ち所業の結果たる優劣善悪に關しては本人の意志は全然加わつていない。従つて其の人間自体には名譽も責任も負はずべきでない筈である。

然し社会的に優劣善悪に對して何とか奨励又は制裁を以て対処しなければ社會の進歩を促し又は秩序が保たれぬこととなるから表彰又は処罰をするのが都合がよい。然らば自分の責任でないのに賞罰を適用するのは不合理だとの論も起るが之は己むを得ぬ。即ち單なる玉ころがしの玉に過ぎぬ人間に例えば罰を加える理由は其の玉がそのまま転りつづけるときは社会的に見て他の人に対し危害を加えることがあるかも知れぬから、其の玉には氣の毒だがその軌道を変えさせ甚しきは其の軌道を断ち切ることさえも己む得ぬことがある。

之は所謂「其の行為を憎んで其人を憎まず」という思想に一致するのではないか。又優秀な人を表彰するのは人間社會の福祉増進を奨励する一つの手段として好ましいことである。この場合も單なる玉に過ぎないところの人間を表彰するより外に道がない。即ち一つの方便であるから其の人が誇らしげに振舞うことは憤むべきであらう。

斯く論じれば絶対的運命論は人間の奮発心を挫折させ、又は非行を増長させる結果となり好まからぬこととなるやに思われるが然し人間誰しも名譽を喜び、惡名を嫌うが人情であるなら、自分の軌道が名譽的であるべきことを念願するであらうからそれに適する軌道に乗らんと努めるのは自然であるから結果的には本論も首肯されてよいと思う。

斯く観すれば現在の状況が非運に沈淪している時、如何に恨んでももがいても絶対的軌道が与えられてある以上何とも仕方がない。而して其の軌道たるや過去の人生曲線は之を見ることが出来るが、將來に向つては全然不明、即ち一寸先は闇である。

拓出来るなどというのは卑怯である。開拓出來たと思つところの後の運命たるや何ぞ知らん最初から其の時点に於て玉転しの軌道が其の方向を変えて行くことに決つていたものが凡人の浅ましきで明かでないかつたに過ぎないといふべきである。即ち其の努力したことが既に運命である。

以上は人の運命に就て論じたがこの考えは独り人間のみならず宙中の森羅万象に共通した思想であると信する。

私の絶対的運命論はややとなすれば若い人をして放縱不軌に陥らしめ、又は進取の氣を失わしめんとする恐れがないとせぬから今迄私は之を公言することを差し控えて來た。只或る人が不遇の状況にいた時之を励ますために私の持論たる絶対的運命論を説いたことが一度あるだけである。落友會の言葉のライブラリーとして残すことの可否につき多少遲疑せんでもなかつたが落友會の會員諸君は既に年輪的にもまたその教養の程度の点から見てもこの論に感服されることなく其の真意を咀嚼されて本論の真意を汲み取つて下さることが出来ると思つて昨年八十の齡を越えた今、私が世に残す言葉とした次第である。今や宇宙衛星の中枢により地球の反対側の出來事を居ながらテレビで見ることの出来る新時代に運命論というものを許さないことを持ち出したことを許されたい。(明治四十四年卒 白山製作所會長)

私が大学卒業後読んだ或有名な哲學者の著書の中に「人生は運命が五分であつた五分は自分の努力によつて開拓すべきである」といふ意味のことがあつたが私は不遜ながら氏の思想は真理を掴んでいないと言いたい。又苟も運命を口にする以上、努力によつて之を開

人生で最も楽しめるべき高等学校と大学時代の私は、家庭的に大変不遇な境遇にありましたので、甚だ恐縮ですがそのことからちょっとしゃべらせて頂きたいと思いません。

私は京都市内で生れ、中学校を卒業するまでは両親の慈愛を一身に受けて甲分のない幸福な家庭で育ちました。長島正隆君は府立二中で、私が五年間を同級生として同じ教室で過ごした学友だったの

# 想

忠 尚 崎 真

懐  
です。同君は向日町の自宅から通学されていたので、上鳥羽にあった母校の正門前で東と西から出会って挨拶した当時の中学制服姿が懐かしく目に映ります。

その頃の我国は、電気事業がさかんに勃興した時代だったので、父が「将来電気事業が有望だからお前も電気を勉強しろ」と言ってお前も電気を勉強しろ」と言ってお前も電気を勉強しろ」と言って、明治四十一年中学校を卒業すると、私に高等学校を受験させたのです。当時全国にあった高等学校の数

は一高東京、二高仙台、三高京都、四校金沢、五高熊本、六高岡山、七高鹿児島七校で、毎年七月一斉に入学試験が行われ、入学は九月でありました。ところがその年名古屋に八高が新設され、その年に限って七高と八高だけの試験を繰り上げて、五月末から六月初めにかけて行われたのです。それで私は父の指図で三高と八高の両方へ入学願書を出したのですが、八高の方がさきに第一志望の二部甲類をパスしたので、父も「三年間他人の飯を食ってくるのもよからう」と言って八高へ入学することに定めたのです。

ところがその年の十一月二十一日父が突然急死したため、一学期の試験を前にして京都の自宅へ戻り、私の運命が急死したのです。私の次の弟妹が二人欠けていたので、当時私の家庭には四十才の母と八才以下の弟妹が三人いて、私には長男として非常な負担がかかっていたのです。それに私の体格が慢性胃腸病で虚弱だったため、親戚や父の友人たちが将来を非常に心配し、私を退学させて父の關係した会社へ入社させようとしたのですが、私は頑として聞き入れなかったのです。そんなことで二学期も休み三学期の途中にやっと復学したわけで、見事に一年遅れてしまいました。

その後家族を名古屋へ引取って一緒に暮らしたのですが、重ねての不幸は母が肋骨カリエスで肋骨を切断するという大手術を受け五月半入院したのです。そんな中で幼い三人の弟妹を親代わりとして小学校への入学から養育の面倒を見なければならなかったのです。母は退院後も神経痛が烈しく起って床に就いたまま十数年も悩んでいましたが、六十歳を越えてからやっと健康が回復し、八十五歳まで生を保ちました、こういう家事事情の下に私は亡父の遺志に従って、大正元年京大電気工学科へ入学させて頂いたのです。



大正元年京大電気工学科へ入学させた頂いたのです。

さて三年間の大学生生活は、それでも私にとって人生航路に光明を見出したという極めて楽しい得意の時代だったと思っています。当時お世話になった電気工学科専任の先生は、教授で難波正、青柳栄司、小倉公平、本野亨の四先生、助教で清水義一、野田清一郎の両先生、講師で鳥養利三郎先生がおられました。

先生と学生の間には人数も少なかったのに特に親近感が深く、本當に楽しく過ごしました。当時のことを一つ二つ思い出すと、毎年教室の中庭に栽培された牡丹の花が立派に咲いた頃、先生と一緒に酒宴の開かれたこと、また一度大阪から夜行の汽船で徳島へ団体旅行をしたとき、夜中の暴風雨で難船して先生も学生もひどく船酔をしました。徳島へ上陸するのとけろりと元気が回復して、徳島在住の先輩から大歓迎を受けたことが懐しく印象に残っています。

大学二年のとき通信者から給費学生の募集がありました。今こそ電気通信技術は日本電信電話公社、国際電信電話株式会社、日本放送協会その他民間放送局などが中心となって、世界でも最も先駆的の華やかな事業となりましたが、大正の初期は今から見ると自動交換も真空管も長距離ケーブルもない旧式時代で、学生にとって魅力がなく、皆強電流の方へ就職を希望したものでありました。しかし私は家庭の事情から早く就職先の定まった方が安心できるし、お役所が一番堅いと思って早速申し込みをしました。さいわい故人の木下市之助君と二人だけの申し込みで競争者が無かったので、二人とも無試験で採用になりました。そして大正四年七月卒業するまで一年半の間、毎月二十円の支給を受け、義務として五年間は勤続しなければならぬことになっていま

した。かくて大正四年七月十三日の卒業式を終ると同月下旬上京し、関東大震災前の木挽町にあった三階建煉瓦造の通信省へ出頭して、同月二十九日木下君と一緒に通信局工務課詰雇の辞令を頂戴しました。当時の電気通信事業は通信局の電務課と工務が主管し通信局工務課長は工学博士利光平氏が全国における技術関係の最高責任者として万事を統轄されていました。驚いたことに就職して一週間も経たないうちうちに海底線部門を担任しておられた大先輩の稲田三之助技師の御命令で、太平洋の真中で不通になっているガム線の修理工事を見学するため、私たち二人の雇を小笠原島まで連れて行かれ、就職して初めて覚えた仕事は海底線工事だったので。爾来昭和十三年三月まで二十二年あまり通信者に技術者として御奉公したのでありました。

京大電気工学科から通信者へ就職された先輩もその頃には毎年一名か二名に過ぎなかったもので、全国に十数名しかおられません。現在御健在の方では宮井誠吉、大森丙、道田貞治、長島正隆の四氏、故人では高田善彦、初見五郎、片岡万次郎、押田三郎、中田末広、村田蕃、志田文雄、鷺見昌頭、沼田七次郎の九氏を合わせて十三名



おられました。これらの方はいずれも非常に親しく、公私とも種々お世話になった懐かしい人ばかりでありました。特に長島君とは中学時代の学友と通信者での先輩という関係で、篤い友情を示され、今日までなおその友情が続いていることに深く感謝しております。

長島君は昭和十二年三月通信者独占の工事請負業である日本電信電話工事株式会社を創立するため通信者を退職して、新会社初代の代表取締役就任されましたが、翌十三年三月には私を同社へ招いてくれ、さらに翌十四年十二月には外地の特殊会社である蒙強電気通信設備株式会社の代表者として私を推薦してくれたのです。

終戦の年の翌二十一年六月私が外地から引上げて帰国したとき、蒙強から引上げてきた元社員の救済が先決問題で、自己をかえりみる余裕がなかったのですが、あの困難な時期に親身の相談相手となって友情を示してくれたのも長島君でありました。

長島君と私は昨年喜寿を迎えた同年齢でこんな深い関係にありますが、私は七十歳の古稀を迎えたとき、人間の寿命についてある信念をもち始めたのです。戦後人間の平均寿命が五十歳から一躍七十歳に伸びましたが、私は自然界が人間に与えておる自然の寿命は、

他の動物の例を見れば百歳をはるかに越えておるものと信ずるのであります。それは人間の日常生活に自然の天理に反することが多くみずから病氣や事故を招いて寿命を縮めておることが非常に多いのではないかという理由によるのであります。

厚生省から毎年発表される死亡原因が、近年では第一位脳出血第二位癌、第三位心臓病、第四位老衰、第五位事故となっていて、これを五大原因とされております。

# 無題



明治 大正 昭和三  
三代 三  
に涉って電  
気

工学の研究とその応用に従事したと云うので、その間の出来事や感想に就て話をしようにとの幹事からのお話でしたが、かかる長い間の而もバラエティーの広い電気の研究に秀れた洛友会の人々に、一斉に共鳴されるような気のきいた話は中々あるものではないので、之を辞退したのであります。いややそう云う客観的ムードに執らわれない、唯時代の変遷とその時代

これによると現在最も難病とされている血管と癌の病気が医療の進歩で克服され、人間の知恵で事故を無くし、生活の改善によって老化現象を極力防ぐことになれば、人間の寿命がずっと伸びることは明らかであります。

## 古田 正康

最後のむすびとして、洛友会会員の皆様が自然界から与えられた天与の長寿を全うせられ、会のみならず繁栄することを祈って、私のお話を終わらせて頂きます。  
(大正四年卒)

### 京大の学風

家に家風があるように学校には学風があります。

明治時代の京大の学風は、その創立時の総長、教授及学生たちの研學精神と京都の風物環境等によって、自然に醸し出されたものであります。それで之は一つの集团的雰囲気であるから、一個人が之を執らえて論説するのは僭越だと

の意見もかもしませんが、実はこの話は私一人の解説ではないのであります。私は京大創立時の木下総長、菊池総長、併に勝本教授、石坂教授、岡本教授、跡部教授、毛戸教授等に直に接し、又理工科で難波教授、青柳教授、朝永教授、久原学長等の薫陶を受け、次いで京大学生クラブ団に於て、日企教授指導のもとに、工学部学生委員となり又、弓道部など運動部の委員を務めましたので、学校の気風に就て人々と談論したものを総合して申すのであります。

そこでこの時代の京大の学風は京大の教學精神と共に、甚だ特色のあるものであります。

まず、創立時の京大の學校精神は大學令にある通り「大學は學問の蘊奥を究めんとする學校」であることは帝國大學は皆同じであるが、そのあり方に就て曰く「京大は、①各己を知り②各自修めた學を世の中に有為に適用して之を世に役立たしめるように③靜かに學ぶ」と云うことを趣旨としたのであります。之が建學の基本精神で、従つてその學風は総合的で、実践的で、そして平和的なムードのものであります。このことは卒業生を見ればよくわかります。例えば文の高田、赤松、電氣の愛宕、岸原、多田、岡村、鈴川、石川等の諸氏を見ると、支配階級に君臨

して牛じることよりも、その場に於て人と和し、その文化發展に靜かに努めた秀れた人々であったことを見ると、この學風が之を生じたものと考えられます。即ち京大の學風は大臣、大將、社長になることよりも、只管學問を實踐して、人生の幸福を増進する為に靜かに學ぶと云う氣風でありました。

尚この學風をよく現わしたものに一九〇六一一九一一の間、木下総長より「知己」なる額を戴いて開舍した京大寄宿舎があります。この寄宿舎は全く自治の學舎でしたが、入舍に際し「京大學生として學風に沿う立派な學生であること」を条件として選考したものであります。立派な學生とは「人格者であること」及び「學業に秀れていること」等を意味し尚在舍2名の紹介保証を要すると云う他に例を見ざるきびしいものでした。私もその選考を経て入舍したので、入つてみると、中はとても賑々たるもので、全く京大の學風が現われていました。殊に感じたのは特待生級の秀才が多く、そして法、文、理、工、医等の良く出来る人々が総合融和して、相互に恰かも羊の子を洗うように切磋するたため、高等基礎常識が発達するようになっていたことでした。この寄宿舎は残念なことに、あるリアリストの事務官により、建築資

材料利用のため一九二二年解体されなくなりりましたが、誠に惜しいことをしたと思います。而し乍ら僅か五カ年間でしたが、この寄宿舎より幾多の温厚なる有為の人々、例えば水道の小野(工)衛生の戸田(医)教育の藤井(文)柔道の伊藤(法)航空の尾崎(工)等の秀れた人々を出しております。これ偏に前述の訓「知己」を基とした学風と相互琢磨により出来たものと思えます。

さて、この学風は戦前迄続いていたのですが、終戦後どうなつたかわかりません。而し現在の如く、制覇の競争の弊害が多い時代には人の和を基として静かに学をすることをモットーしたこの学風は今も尚尊いものと考えます。

## ○ 人生テーマ

パスカルが「人は考える葦である」と云つた通り、人はだれでも考えがある。それを自覚の有無、その発表の如何、又それに共感者の有無等は兎も角、人は人生につき何等かの哲学的考察をもつています。それで私も人並に、当たり前と生意気かもしないが、一つの人生テーマを考えたいのであります。

五高時代には赤松氏等と印度哲学を研究し、又クリスチアン岡山氏等とバイブルを研究しました。そして京大時代には、大徳寺のお坊様について仏教を修行しました。而し残念乍ら会得も大悟もくろうとの域には達することが出来ませんでした。中にも禅は京都で修めるが最もよいと云われ、従兄にすすめられ南禅寺に参り、禅の「静慮で心を空にする」ことから始め、座禅をしたり、教を習つたりして、所謂、人生の真理、自己の大悟等と云う、大それた願目とも取り組んだのであります。而し結局、禅は宗教であつて、信仰は一元論で、私共唯物的三段論理の現象学である電気工学とは結びつかないことを知り、野狐に終わったのであります。

而しこの間、私に一つの光を与えたものがあります。それは釈尊の「世の中は苦行の常道である。人と共に苦行することにより世が開ける」の教でありました。秋はこの教により一つの人生観、即ち処世哲学とも云うべき「人生テーマ」を得たのであります。そのテーマとは次の如きものであります。「人は生きるそして集団で生きる複雑なる動物である。それでは、自ら己を持するとともに、物、心、両方共に相互に貢献し助け合つて、人生を豊く且つ豊にするものである」

このテーマは平凡のようであるが、実は中々難か哲理を含んでいるのであります。仮に之を貢献哲理と申します。まず第一に「人は生きている」ということ。何で何のために生きているかと聞かれると、古今東西の宗教家も哲学者も真の解答を与えることは困難で、唯生きたいから生きると云うだけであるが兎に角、事実として人は生きているのである。次に「集団で生きる」と云うこと。之も何で何のために集団で生きるかと、聞かれるとだれもその真理はわからないのである。而し人は習性と云うか本能と云うか、自然の果物を食ひ、裸で居られた大昔はとも角、現代の文化人に於ては生活は複雑化し、一人では生きていられないようになり社会、集団を組織し、その中で生きているのである。そしてある人は人を、他の動物に比して文化的高等動物であると云っている程甚だ複雑なる、多種多様に渉る社会集団をなして生きていること、之も事実であります。

例えは食料、衣料、機械、燃料等をそれだけ生産する人々は、各自自分に要する量以上に他の人々の要する分を産出し、之を互に他の人々に貢献する。実際は物々交換の代わりに貨幣経済により、之等生産品を社会に貢献し、代償として貨幣を受入、この貨幣を以て他の人の貢献物を買ひとると云うことです。之は簡単な貢献し合ひの例であるが、其他複雑せる事項に於ても、物質の方面でも、心理の方面でも、物々交換の理に従ひ、相互に貢献し合つていけば人生は幸福になると云うのであります。而してこのテーマは実際は大いに展開するのであります。即ち文化の発展と共に貢献の内容が様々となり、次に何を何にいつ貢献するかにつき複雑となり、又直接、間接の別により或は反逆作用等もあつて、貢献の事態は種々に展開し幅溷するのであります。而しこの貢献哲理は人生の趣旨を示した一つのテーマであつてその原則は人生万事に一貫しているものであります。それは恰かもオーケストラに於て、序に於ける単純テーマ曲が、楽章の進むにつれて、迂余曲折して展開はするが、一貫してその骨子が全体を貫くようなものであります。私はこの貢献哲理によつて一貫事業に従事しました。それで以下述べる話にはいつもこの趣旨が入ってきますので、まずこのテーマに就て話を致しました。

## ○ 時代と電気工業

明治・大正・昭和の時代を五期に分ち、各文化の変遷と電気工業の推移を話します。

まず明治の初期之を第一期としますと、第一期に於て、法律で電気は物と見做しました。見做するとは断定であります。之は盗電と云う事件のため、法律家が法律文語で、「電気は物として取扱う」ときめたのであります。而し乍ら実際は電気は物ではない。即ち気体でも、流体でも、個体でもない、デメンションをもつた物ではない人は唯電気は其の変動の現象を認識して始めて其存在を知る不思議なエネルギーの一種であると云うその不思議に興味をもつた明治の人々は一八八〇頃から本格的に電気工学を研究し始めたのであります。

これで、明治の中頃迄を第二期(一八八〇—一九〇〇)としますと、この時代の一般の人々は文明開化を目標とし、政治方面では西郷、大久保、木戸、勝等の活躍、経済界では福沢、大隈、松方等の活動等により日本の文明は徐々に進展し始めたのであります。この

間電気工学工業は僅かに電信技術等電気利用の濫觴を示すに止まりました。

次で明治の後期迄を第三期(一九〇一—一九一三)としますと、その時代の一般の人々は産業勃興の近代資本主義発展を目標としたのであります。例えば政治経済の方面では、前期に於て殖産工業の発展を望んだに係らず資金不足のため不換紙幣乱発からインフレとなり、経済困難となったので、この第三期に於ては、松方大蔵相の財政整理となり、日銀を創立し、金銀を基とした兌換券発行、貨幣安定経済を打ち立て、又官営の不経済性を認め、経済創意を基本とする民営企業をすすめた。例えば鉱山、繊維紡績は三井に。海運、造船は岩崎三菱に、セメントは浅野と云う工合に、殆んど目ぼしい事業を民営に払下げたのであります。その結果、産業の利潤は大いに上がり、漸次不況を脱し石炭、鉄鋼、紡織、機械等を始め、種々の生産事業はこの資本主義によって大に振興したのであります。そこで電気工学、工業に於てもこの資本主義により、世界各国より學術技法を導入し、大いに進展したのであります。即ち大学に於ては志田、中野、鳳、難波、青柳等の諸教授は日本富国のために電気を勉強し工業に尽せと教えられ、当

時の学生も之に従い、大いに学び、社会に出て電気を発生し、利用し、国家産業を發展することに邁進したのであります。例えば京大電気卒業者を見てその趨勢がわかります。試みに洛友会名簿から数氏を取上げてみますと、發送電事業方面では愛宕(35) 多田(37) 広瀬(40) 石津(40) 石川(43) 小山(43) 福井(43) 寺村(44) 佐藤(44) 等、電気応用方面では岸原(36) 古田(45) 等、電機器製造方面では清水(35) 小田島(45) 志田(45) 等、教授では本野(35) 鳥養(元) 等の諸氏は何れもそれぞれの方面でこの時代の目標に従って働き富国の実をあげているのがわかります。尚この時代、電気事業に於ては資本の充実により、水力電気が啓発され、電気供給事業が著しく發展したのであります。又電機製造事業に於ては之も資本の充実により、東京電気、芝浦、日立、三菱、富士、日本電気、安川等の電機器製作所致大く進展したのであります。

次に昭和の初期を第四期(一九二七—一九四五)としますと、この時代になれば日本の人口は増々多くなり、人々の働く場が不足し、不況にあえぎ、外債に苦しみ、遂に前期盛なりし資本主義は本期に於て行き詰りとなり、諸事経営困難を生じてきたのであります。それで欧州諸国の先例により日本も海外發展策をとることとなり、従って軍政が強くなり、遂には戦争を始め、物も経済も統制となって、産業は萎縮してしまつたのであります。電気工学も工業も、一般の状態と同じく、何等進展を見ず、学徒は多く出征し、全く沈滞でありました。次に終戦後を第五期(一九四六—一九五六)としますと、一般に於てはこの時代、思想が個人尊重の民主主義となり、経済はマルクスの社会主義や、ケーンズの新資本主義や、次でマルコピックのセレクション理論や、トーピンの分析論等、欧米から交錯して入ってくる諸思想に混乱され、文化は植物文明から動物文明となり、哲学も遠くは儒教、論語、近くは西田哲学や和辻、九鬼等の説の如き東洋哲学とヤスパース、ニーチェ等の欧州の新しい哲学とが入れまじり、まとまりまりが無いようになり、ある評論家は、今や心学の危機であると言っているのであります。

さてこの期に於て電気工学工業はどうかを見ると、実は、前述の如き一般思想の交錯混乱に係り無く、経済の回復により前第四期末の沈滞より反発し大に進展したのであります。例えば発電に於ては、多目的水力発電、熱効率増進火力発電、原子力発電等、電気応用に於ては電子応用、音、光、関係利用、テレビ、ラジオ、医療、家庭機器等の応用に広く行き涉り、文化に大に貢献をしたのであります。さて以上五期を通過してみると、電気工学工業は、一四期迄は思想や政策の変動と共に浮沈しているが、第五期からは、工業は独走の形でどしどし進展しているのがあります。之は全く従来の歴史に見ない事実であります。その解説に就て、ある評論家は、今迄の哲学を一步超越した現象哲学がこの解釈を与えるであろうと云っていますが、兎に角、今注目すべき現象であると考えます。

働く場

世の人は皆働かねばならぬ、それで人は働く場をよく知り、適當の場を選定せねばならぬ。即ち人生航路の列れ道とも云うべき、働く場をきめることは人として重大なることであります。それで私はこの働く場のきめ方につき私の経験を述べます。私の場合は、その時代電気技師不足の時での方面でも就職は自由でしたが、何が適當かは青年でやはり迷いました。ここで働く場の定め方を三点に決しました。

- 一、自分の特性に合うこと
  - 二、自分の人生テーマに合うこと
  - 三、場の広さと深さ
- 以上の基本に就てよく考えることにしたのであります。
- 第一の自分の特性にあうこと、之は非常に必要ことです。それで電気工学工業を大別して七方面に分けました。
- ① 發送配電、電気事業方面
  - ② 電気応用事業方面
  - ③ 電機器製造事業方面
  - ④ 電気工学研究方面
  - ⑤ 学校教授
  - ⑥ 統制方面
  - ⑦ 商、其他の方面
- そしてこの七つの方面をよく研究して自分の性能はどの方面に適しているか、どれが一番すきかと云うことを調べたのであります。その結果、私は②の電気応用の事業が一番すきで、又自分に最も適していることを知りましたので、②に決定したのであります。
- 次に、二と三に就いて考えましたが、之は若年の関かることではないと思ひ、社会をよく知っている先生に相談することとし、「私は電気応用の方面がすきで、又適していると思ひます。それで貢献の広い場のある会社を選んで下さい」と申しました処、先生は「よしそれなら、今申し込みの来ている三井の事業会社に入れ」と申しられ尚「三井の事業は三井の大資本により、団理事長統率下に、エネルギー資源たる石炭、文化資材た

る鉄、銅、亜鉛等の金属及び化学薬品、繊維等の生産の拡充を計っている。この三井の団博士の幕下に入り、広大な産業に電気工学を応用し、其の生産に貢献すれば、先は事業の幹部となり、日本の産業に貢献することが出来るであろう」と附言されましたので、私は上記定め方一二及三に合致したる働の場は之だと考へ三井鉱山会社に入社したのであります。

この話は私の一小事件ですが実は今に於いても、かくの如き「働く場のきめ方」は参考になるかと思ひこの話を致しました。

仕事

さて私は以上の如き時代に際し、どんな仕事をしたかと云われますと、まず一九一二年、三井鉱山会社に入りましたが、始めは労働者並に取り扱われ、炭堀や電工等の仕事をしました。而し暫くして、専門の電気担当となりましたので、電気工学を産業に応用し、その能力を上げたのであります。例えば、

鉱山に於ては優秀なる電気機関車を地下に用いて出鉱能力を上げたり、又ケープルの改良を図り、地下深部探鑿を進めたり化学事業に於ては高圧高温の蒸気ブリードタービン発電機を設置して化学薬品生産能力を上げたり、金属製錬事業に於ては電解工場を新設して金

属の生産能力を上げたり等、して種々の場に於て、色々と事業に貢献したのであります。かくして約二十年を経ましたが、ここで私は技術担当から事業経営へ移りました。そして諸種の事業の運営に尽しました。例えば石炭利用のため九州共同火力発電会社を創設しその役員を勤めたり、電気機械器具製造を良くするため、東京芝浦電気会社の役員を勤めたり、海外発展を命ぜられ、朝鮮金山事業を啓発したり、朝鮮アルミ工業を創設したり、北海道硫黄会社の役員を勤めたり、等をして種々の事業を運営しました。

そこでこれ等諸事業に就て、色々の苦心談、成功談、失敗談、等数多くございますが長くなりますから、その詳細のことはここには省略することに致します。而し唯この長期に渉る事業を通じて私は事業に関する一つの信念とも申すべきものを掴みとることを得たと思ひますので、その信念なるものを話してむすびと致します。

むすび

上述の如き、時代と事業の体験により私の得たる事業成果の信念は要約して次の通りであります。一、事業人は自分自身の哲学的着想を持つこと。二、事業には( )に優秀人を

配し、世界で優秀なる機械器具を用いること。

右第一は心理の問題であります。そして誰でも何時でも考えれば出来ることです。例えば、私の場合、前述のテーマ、仮称、貢献哲理を持ち続けたのでありますが、それが事業上甚だ役に立ったのであります。例えば石炭産出、火力発電、機械製作、産金、アルミ製造、北海道水電等の場合、之に国家社会が所要しているものだから之を貢献すると云う趣旨を第一義として計画したので、種々の困難を乗り越り、又経済に於ても貢献し合う精神により、合理適正なる経理が求め得られたのであります。即ち「人生は互に貢献し合つて楽しくなり文化が進む」と云う着想。之

は近代哲学者ヤスパースの云う実存の着想と相通するものと思ひますがこの着想の如き一つの自身の哲学的着想を確かり把握することをすすめるものであります。第二は物的の問題であります。この世界の優秀品使用のことは普通のことのようにですが中々さに非ず。世の中は複雑で、こんな簡単なことが実はとてもむずかしいのであります。例えば私の場合、電気機関車採用の場合、ケープル仕様選定の場合、高温高圧ブリードタービン発電機採用の場合、ゼーダーブルグアルミ炉採用の場合等に於て、私はその担当技師長又は役員として「優秀品亡びず」の言葉をふりかざし、断然第二のモットー通り、世界の優秀品を購入し

戦争と平和

上林明



昨秋の洛友会の関西支部総会に親と子

と孫の三代が仲よく出席さして戴き、懐しく楽しく秋の夜をすごしました。色々な意で我々の安らかな幸福をしみじみと味いました。一代目は午で八十四才、二代目が

たのであります。而し実はその間、資本系統のメーカーの注文取の政策による圧力、或は国産奨励策の政治的圧迫等により幾度か、私の優秀品主張は挫折しそうになり、頗る困難したのであります。それでも私はこの第二の信念により勇気を以て、かかる諸難を切り払い、遂に世界の優秀品を採用し、そして良好なる成果をあげたのであります。

以上説明した通り前述、一、哲学的着想を持つこと、二、世界優秀品を用いることこの心、物面の信念は事業人に必要なことで、而して成果をあげる秘訣であると考へ敢てここに之を推奨してこの話のむすびと致します。(明治四十五年卒 元三井鉱山会社役員)

問題は外でもない日々の新聞に報道されているベトナムの戦争の事です。初めは南ベトナム内の赤組と白組との争い事であるように見えていたのが、だんだんエスカレートして行きアメリカが白組に力を入れて行き赤組の応援団になり込むようになりました。も早

世界平和の上から見ても非常に危い。人道的な立場から見ても理論的にも戦争は特に日本人はこりこりしている筈ですが、その危険に不感症になり、特に日本の経済が



アメリカのベトナム戦争のために大いに助かっているとなれば何だ、人心の中ではベトナム戦争を続けたいってほしいような気になっている。ベトナムの平和ムードが少し報道されただけで株価が下る等考え合わせ恐ろしい事です。

最近アメリカから帰って来た私のM学友は米国の財界人の八十パーセント以上は戦争続行を望んでいる。反対しているのは一部の教授群と学生位だとの事です。

併しアメリカのシカゴに本部のある自由と知性と平和を標榜している世界最大の奉仕クラブであるライオンズクラブでは今年の創立五十周年の記念事業として、世界中の青少年から「平和論文」を募集して地上の戦争をなくす事にその激情を傾けると言っています。日本人よりズット宗教心が強くて大部分のアメリカ人が日曜には教会に礼拝して天地の平和と栄光を祈っていても尚且つ為政者の戦争への道へ流される事を防ぎ難いようです。

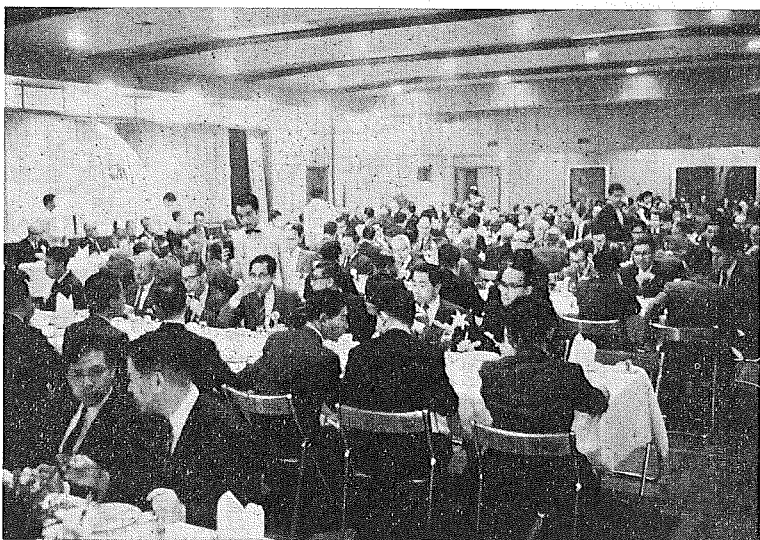
日本人こそもっとも強く戦争に反対する義務があると思えます。広島や長崎の原爆を思い出す迄もなく東京でも大阪でも恐ろしい戦災を体験しています。愛する肉親を戦争で失っています現に日行われているベトナム地帯や北爆は原水爆こそ使われていないがナ

バーム弾や焼煙弾が日本で使ったものより激烈な大量が使われています。私自身の事で恐縮ですが、私は戦争が終わって二年目の春突然連合軍の命令により戦犯容疑者として真鴨の拘留所におちこまれました。一カ月後、桜満開の東海道線を手錠をはめられ英軍に護送され広島を経てシンガポールのチャンギーの刑務所に入れられました。私がジャバで飛行場中隊長をしていた時のケースです。

深夜に日本の飛行機にのって逃げようとした捕虜をアワヤ出発という所で私の警備兵が捕えて銃殺したのです。これが連合軍の三名の飛行将校だったので私の部下の小隊長三名と命令系統として当時の軍参謀二名と六名が容疑者です。私は煩悶の後、責任者になって他の五名を助ける決心をしましたので。当然絞首刑を覚悟して年末迄チャンギー刑務所の未決囚として暮らしました。その間幾多の死刑囚の最後の大声「天皇陛下万歳」を聞き、私もそのために修養し遂には悟りの境地の入る事が出来、四十キロ迄減った体重もとの六十キロ近くになっていました。所が助けようとした他の五名の証言に矛盾がなかった事や或はオランダの将校夫人の人格証言がよかつたのか突然裁判は開かれぬ事になり全員ゴーホームに決って無

事日本について、初めて平和の有り難い事をしみじみと味わい、戦争はしてはならない、もういやだ、という事を体得した訳です。この間戦犯裁判対策、上官と部下間の美談や醜い確執、人間の悟りと煩惱等はいつか書いておき度いと

## 林 重憲先生 退官記念会行事



思います。ここでは割愛させていただきます。さて楽しかった昨年の大阪の洛友会の思い出から戦争を恐れるの余り、日本人が一人一人平和に努力される事を祈り筆を擱きます。

(昭和三年卒  
元京阪電鉄常務)

記念行事の概要を略記すれば次のとおりである。

### 記念講演会

- 林千博教授の開会の辞に始まり同教授司会の下に
- 一、送配電の近代化について 和田昌博氏 (関西電力)
- 一、衛星通信の近情と将来 田中信高氏 (日本電気)

- 一、発電機器の最近の動向について 片岡高示氏 (三菱電機)

- 一、電気回路網理論について 木嶋昭氏 (京大電気第二教室)
- 一、電力系統における進行波の理論と計測 卯本重郎氏 (京大電気教室)

以上三氏の講演が行なわれた。これに対して、先生の謝辞があり、池上教授の閉会の辞により午後四時過ぎ講演会を終了した。

### 記念品贈呈式

先生並びに御令室、御令息繁様、御夫妻、博様、讓様、鉄教様、御令嬢一様、御令孫和憲様、晃様の御臨席を得て、近藤教授司式により午後五時開式、まず実行委員長前田憲一教授より式辞、記念品目録贈呈があり、次いで小磯良平

去る三月末日をもって定年退官された林 重憲先生の御功績を記念し、感謝と慶祝の意を表わすため「林 重憲先生退官記念会」の

祝賀行事が、五月十三日午後一時より電気総合館および京都ホテルにおいて、遠近各地より多数の参会者を得て盛大裏に挙行された。

画伯の筆になる先生の肖像画二面の除幕が満場拍手の中に御令孫和憲様の手によって行なわれた。

続いて、奥田京大総長、友人代表中国電力真田氏、門下生代表卯本教授の祝辞がありさらに先生の謝辞があつて目出たく贈呈式を終了した。

記念晩餐会

先生御一家を主賓に、奥田総長、前田敏男工学部長、東大電気関係教室代表山田教授、阪大電気関係教室代表青柳教授、石原防災研究所長、榎木工学研究所長、鳥養、岡本、阿部、松田の各名譽教授その他、京大関係招待者、石黒洛友会員等約二百二十名の出席を得て午後六時開宴された。

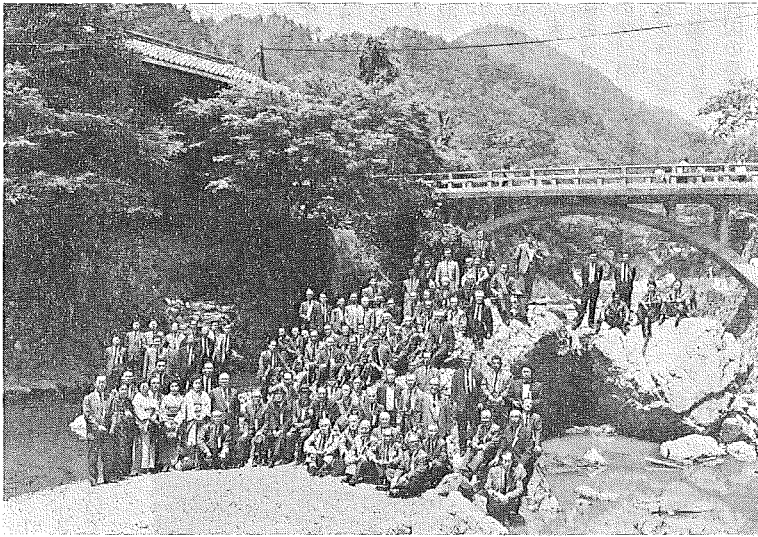
大谷教授司会によつて、まず前田委員長挨拶を述べ続いて先生の謝辞があり、奥田総長の発声で先生御一家のため乾杯、宴漸く甜となるころ、司会者の指名でテーブルスピーチに入った。まず東大山田教授、次いで前田工学部長、阪大青柳教授、九州電力宮田氏、岡本名譽教授、関西電力和田氏、続いて神鋼電機富満氏のテーブルスピーチが次々に行なわれた。ここで、司会者より原子力発電一本松お氏よび阪大菅田工学部長から祝電が披露された。次いで、外遊のため欠席されるので、前もつてテープに吹き込まれて記念会あてに

届けられていた成蹊大学福田教授の感激的なテーブルスピーチが披露され、さらに国際電々難波氏、石原防災研究所長、熊谷愛媛大学

長、堀尾教授、日立製作所橋本氏、シンコーメタリコン立石氏、最後に三菱電機石川氏のテーブルスピーチが和気あいあいのうちに行な

われた後、前田委員長より閉会の挨拶があつて、午後八時半晩餐会の幕を閉じた。

なお、先生の退官記念会行事の詳細は、近く刊行される「林重憲先生退官記念集」に掲載し、磯金者および関係機関に配布する予定である。



洛友会総会 関西支部総会開く  
昭42514 京都洛西清滝に於て

総会と懇親会を盛大に催した。新緑の清滝川のほとりで記念写真をとる後ます屋の川魚料理で懇親会を催した。

◇関西支部総会

森支部長外遊中のため、山県敏夫氏が議長となり事業報告並に決算報告があり会則一部変更の件を可決し、昭和四十二年度予算を決定した。幹事改選の件を附議し新幹事に次の諸氏が選ばれた。

総務幹事 小森幹夫  
会計幹事 江森登喜夫

留任 間崎竜夫 山県敏夫  
福中希生 宇野敏一

新任 前田藤治 山本重俊  
米原幹夫 松枝克礎

橋本安雄(以上関西電力)

井土守(住友電工)

童沢善信(松下電器産業)

池田栄一(大阪変圧器)

卯本重郎(京都大学)

北岡隆(三菱電機)

◇洛友会総会

関西支部総会に引き続き洛友会総会を開催、大谷幹事司会の下に鳥養会長議長席につき先ず会長挨拶に引き続き昭和四十一年度事業報告、並に収支決算及び昭和四十二年度事業計画並に収支予算をそれぞれ付議し山本幹事説明の後、満場拍手裡に承認可決した。

続いて役員改選の件に就き議長は詮衡委員を石川辰雄、和田正弘、古田久一、大谷泰文、松井貞信の五名に指名し石川委員長より審議の結果、左記の副会長を増員することに決したと報告し議長はこれを会議に諮り満場の拍手裡に可決した。

副会長 芦原義重(留任) 巽良知

林重憲 平井寛一郎 本多静雄

真田安夫 宮田秀介

又議長は洛友会顧問として左記の各氏を常任役員会の推薦により推薦することに決したと報告し、満場の拍手裡に可決した。

顧問 多田耕家、乙葉真一、石川芳次郎、野田誠一郎、小田嶋修三、渡部兼雄、高柳与四郎

以上により議事を終わり教室の近況につき前田憲一教授報告の後ます屋の日本料理に舌鼓をならし、お互い健康を祝しつつ歓談に時を移した。

終りに出席者の最長老上林一雄氏(八十六才)の発声により洛友会万歳を三唱して散会した。

時に午後三時。

出席者(〇印夫人同伴)

(大元) 鳥養利三郎

(大六) 〇大西 冬蔵、奥平 安

上林 一雄、光野 重威、保寿

康象、松田 長三郎

(大七) 阿部 清、間崎 龍夫、

宮崎 佐加枝

五月十四日(日曜) 昭和四十二年度洛友会総会と関西支部総会を兼ね洛西清滝にて開催した。出席 兼合、バス二台で高雄より西山下ライプコースを経て清滝ます屋で

当日は心配された雨が上がり晴天に恵まれ京都駅前午前十時半



洛友会 昭和41年度収支決算書

Table with 3 columns: 科目, 決算額, 予算額. Rows include 会費, 電気講習所会費, 預金利子, 雑収入, 繰越金, 合計.

洛友会 昭和42年度収支予算書

Table with 3 columns: 科目, 予算額, 前年度決算額. Rows include 会費, 電気講習所会費, 預金利子, 雑収入, 繰越金, 合計.

支出の部

Table with 3 columns: 科目, 決算額, 予算額. Rows include 刊行物費, 名簿編集費, 同印刷費, 同発送費, 会報編集費, 同印刷費, 同発送費, 諸費, 備品費, 通信費, 会合費, 総会費, 集金費, 総掛費, 旅費, 臨時費, 懇話会補助費, 繰越金, 合計.

支出の部

Table with 3 columns: 科目, 予算額, 前年度決算額. Rows include 刊行物費, 名簿編集費, 同印刷費, 同発送費, 会報編集費, 同印刷費, 同発送費, 諸費, 備品費, 通信費, 会合費, 総会費, 集金費, 総掛費, 旅費, 臨時費, 懇話会補助費, 繰越金, 合計.

Table with 2 columns: 現金, 金額. Rows include 現金, 預金, 信託, 定期, 普通, 振替, 現金計.

昭和42年3月31日現在
三菱住友信託銀行京都支店
住友銀行京都支店
洛友銀行京都支店 第一銀行百万遍支店
第一銀行百万遍支店

出席者(二十五名) 林重憲先生 山本幹事 真田安夫(昭二) 佐川重雄(大十四) 木元正夫(昭二) 佐々木毅一(昭十二) 古賀七郎(昭十五) 角井勉(昭十五) 井上武(昭十六) 江見耕平(昭十七) 竹本文明(昭二十一) 小川清(昭二)
(昭二) 門野内忠幸(昭二十三) 浴厚夫(昭二十五) 野中清文(昭二十六) 仁木可也(昭二十) 池内浩一(昭二十八) 小刀一晃(昭二十八) 久保潤(昭二十九) 井上幸夫(昭三十一) 安原碩人(昭三十三) 川村修(昭三十五) 牧征滋(昭三十八)
日山三三(講大九) 小野政市(講昭三) 徳原平蔵(講昭三) 高橋広市講(昭十四)
42年度役員
支部長 真田安夫(昭二) 幹事 木村一男(大十五) 高橋親雄(昭四) 竹内貞美(昭七) 潮見公安(昭八) 古賀七郎(昭十五) 松谷健一郎(昭十六) 井上武(昭十六) 堀井豊治(昭十九) 門野内忠幸(昭二十三) 三田徳平講(昭七) 藤村巖(講大十)

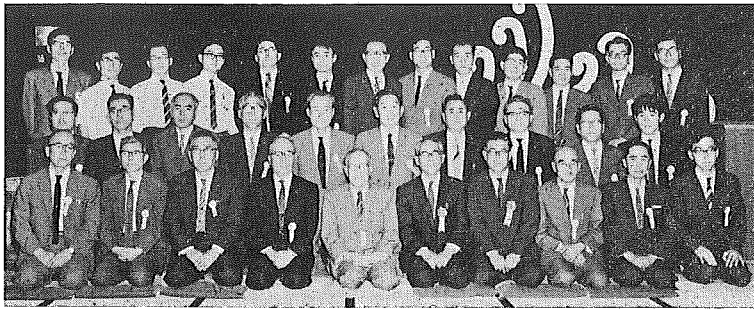
中部支部総会

去る六月二日、林重憲、高木俊宣、木嶋昭、卯本重郎諸先生をお迎えして、名古屋山翠楼において、昭和四十二年度、洛友会中部支部総会を開催した。

本支部長の挨拶に始まり、幹事よりの昭和四十一年度の行事決算の報告、四十二年度の行事予定は満場一致で承認可決された。

つづいて林先生始め諸先生の教室現況の御説明を伺った。本日はとくに鳥羽より御参会され益々御元氣な小田島大先輩の有益な御話を中心に和氣あい盛會裏に散会した。なお、当日の出席者は下記の通りである。

- 来賓 林重憲、高木俊宣、木嶋昭、卯本重郎
(明四十五) 小田島修三(大十二)
庄野誠一 村瀬邦明(大十三)
河津吉兵衛、本多静雄(大十五)
田中卓次、知識兼則(昭六)
宇野茂道、古田久一(昭八)
高尾磐夫、三好保憲(昭十二)
大杉幹(和十六) 秋田清四郎(昭十七) 谷村愛道(昭十九)
川合幸彦(昭二十) 小島謙一(昭二十二) 佐藤彰洋、外山敏夫(昭二十三) 河島純孝(昭二十五) 武田哲夫(昭二十六)
石川進、鈴木惠雅(昭二十七)
遠藤茂(昭二十八) 前原恒之、横川京次(昭二十九) 倉野



昌夫(昭三十一) 鷲尾 博一(昭三十二) 中村 修三(昭三十三) 坂入 武彦(昭三十六) 増田 宗敏(昭四十一) 堀内 肇

### 東京支部総会

昭和四十二年五月二十日、東京市ヶ谷会館にて支部総会を開催した。本部より鳥養会長、林重憲副会長、山本幹事、教室より前田憲一教授、近藤文治教授、高木俊宣教授が出席した。役員改選の結果

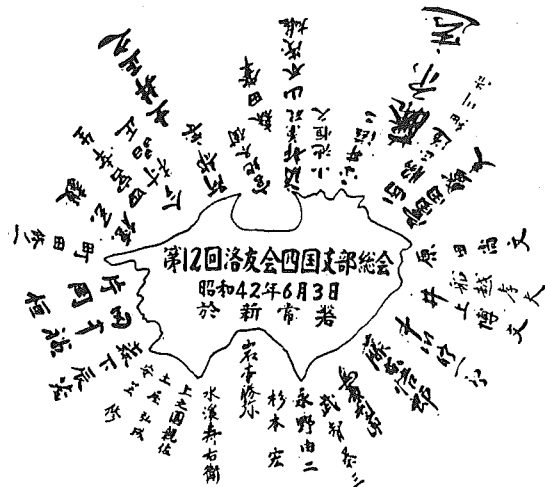
山本三郎支部長、杉尾三郎副支部長は退任され、新しく支部長に久野清氏(昭四) 副支部長に藤田真一氏(昭六)が選出され、評議員及び幹事も下記の如く選出された。総会后、懇親会にうつり、午後八時頃散会す。

- 支部長 久野 清(昭4)
- 副支部長 藤田 真一(昭6)
- 総務幹事 中島 達二(昭22)
- 会計幹事 服部 周三(昭23)
- 評議員(総会選出) ○印は幹事支部長委嘱
- (明45) 古田 正康(大2) 宮崎 駒吉(大3) 長島 正隆(大4)

- 真崎 尚忠(大5) 伊沢 辰雄(大6) 大西 冬藏(大7) 乙葉 真一(大8) 高見祥平(新)
- (大9) 菅 琴二、堀岡 正家(大10) 池内 是憲(大11) 榑原 吉三(大12) 松本 弘、小森 修二(大13) 巽 良知、高島 正一(大14) 橋本 真吉、瀧本 浩富
- 永和郎(大15) 山本 三郎、石川 辰雄(昭2) 交川 有(昭3) 浜崎 諒新(昭4) 久野 清、安達 遂(昭5) 真塵 昌一(昭6) 藤田 真一(昭7) 高原 正也、吉岡 俊男(新) (昭8) 久保 久雄(幹・新) (昭9) 市村 宗

- 明(昭10) 有馬 敏彦(新) (昭11) 杉本 省一(昭12) 正木 知己(昭13) 松尾 三郎、伊藤 英太郎(昭14) 高崎 勲、築木 二郎(昭15) 相木 一男(昭16) 香川 揚一(新) (昭17) 吉岡 忠新(昭17) 太田 英雄(昭18) 糟谷 績(新昭19) 木村 小一(昭20) 泉 秀雄(新) 小泉 忠司(新) (昭21) 広田 方孝(昭22) 池上 文夫(昭23) 河野 義徳(昭24) 中村哲夫(昭25) 吉田 正彦(昭26) 岡本 裕允(昭27) 青木 信雄、伊藤 功裕(昭28) 丸林 元(新制) 井上 誠一(昭

- 29) 間瀬 光朗(新) (昭30) 中尾 英夫(昭31) 永野 勇(昭32) 村上 啓一(昭33) 村田 久雄(昭34) 伊藤 健(昭35) 上田 裕、長谷 良秀(昭36) 阿部 静男(昭13) 黒瀬 泰三(新) (昭38) 阿川 泰(新) (昭39) 篠原 進(新) (昭40) 越智 昭文(新) (昭47) 江上 貞夫(新)
- 備考 新は今度の総会で新任される評議員(幹・新) は従来評議員で今度幹事を兼ねる人(新) での人は新評議員で新たに幹事も兼ねる人



### 四国支部総会

(昭42・6・3 高松)

六月三日(土) 本部より鳥養会長、上之園先生ならびに山本幹事をお迎えして高松市内新常盤で午後六時より開催した。

当総会もこれで第十二回になるが、回を重ねるに従い会員の増加と相まって出席者も増加し、教室関係五十六名中三十名が出席するという大盛況。鳥養会長は若い会員達に囲まれ少しもお疲れの色を見せず「一寸トイレへ立つ逃げがはせぬ」といった調子で九時過ぎまで、上之園先生はその後も電力系統に関する諸問題についての程々有益なお話や、またこれから外遊

する若手に対して懇切な経験談に花を咲かせるやらで十一時前までそれぞれ努められた。

北脇支部長が四国を離れられることになり、後任に宮地冬樹氏(昭二)が満場一致で選任された。副支部長、幹事は全員留任。尚北脇氏は京都の方へ落着かれるが幼少の頃過ごし、卒業後も四十年近く過ごした四国は去るにしのび難いものがある。今後四国支部に席を置かせてほしいとの希望があったので、その旨了承した。(土居幹事)





### 北陸支部総会

北陸地方気象台発足以来の新記録となった千天続きも終わりをづけ、山野の緑も漸く生氣を取りもどしてきた七月八日(土)四十二年度洛友会北陸支部総会を、富山市海老亭において開催した。本部から鳥養会長、林(重憲)副会長、池上教授、山本幹事をお迎えした当日は空梅雨模様のおむし暑い日であったが、久し振りにお目にかかった鳥養会長の元氣なお姿には一同いよいよ意を強うし次た第であ



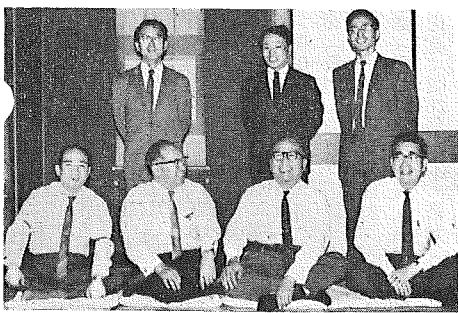
### 九州支部総会

唄、鶴飼さんの哥沢等、日頃の精進の程を拝聴し、名残りはつきなかつたが洛友会と教室の万才を会長および金井さんの呼唱によって三唱し散会した。写真は北陸支部総会

洛友会九州支部昭和四十二年度総会は六月二十七日十八時より福岡市内天神ビル十一階特別室にて、鳥養会長、山本幹事

支部会員三十六名中、遠路福井から出席された村本、宮越両氏を加え出席者十七名。荒井支部長挨拶、業務報告、支部役員留任の決定等々、鳥養会長のお話しに明日への決意を新たに、山本幹事、池上教授の本部教室の近況報告に赤練瓦造りの教室を思い出しながら今後益々発展することを祈った次第です。つづいて懇親会に移り、談論風発展、会長の益々お盛んな様子に一同わがごとくのように喜び思わずメートルをあげ、宴酣なわ斉藤さんの手品にだまされ、我々が初めておききし、井さんの小

林名譽教授、大谷教授をお迎えして開催された。出席会員は三十名で遠く大分地区からの出席者もあり盛会であった。総会は高柳顧問、鳥養会長の挨拶に始まり次の議題を万場一致で承認した。  
第一議案 昭和四十一年度会計報告承認の件  
第二議案 昭和四十二年度九州支部役員承認の件  
幹事より本部状況報告、林名譽教授の挨拶、大谷教授より母校の近況報告があり、総会を終わった。



総会終了後例の如く懇親会懐しい鳥養会長の四方山話、最近の学生気質、昔の学生時代の思い出等々酒杯をかわしての話はつきず、三十分予定時間を過ぎ二時半再会を約して散会した。

### 北海道支部総会

濱く初夏をむかえた六月十七日、北海道電力北一条クラブで開催した。今回は先ず役員改選を行ない、小田部支部長に代わり、新しく山上孝氏を、また副支部長に師尾氏を満場一致で選出された。集った半数以上は珍らしい顔ぶれであり、中でも嶋田氏と師尾氏は卒業以来二十五年ぶりの喜び一しほであった。皆々この遠き北海より、久しぶりに、京、を想い楽しい夕べを過ごした次第である。

### 東北支部総会

出席(17) 嶋田、師尾(21) 池田(25) 山口(28) 芝山(31) 谷村(33) 中山  
北海道支部役員(改選) 支部長山上孝、副支部長師尾守泰(本部幹事兼任) 幹事芝山龍、中山道夫

6月3日青葉に囲まれた仙台市の共済会館に本部の近藤先生をお迎えして第2回東北支部総会が開催されました。  
支部会員としては、平井支部長、内田副部長をはじめ青森、秋田からの参加もあり合計11名の御

出席を得て議事を進め本部役員の報告、京都大学の近況など誠になつかしいお話のうちに総会はとどこおりなく終了し、次いで内田副支部長から欧米における宇宙通信の近況に関する講話が行われ諸外国が巨大な研究設備開発に力をそそいでいる実状を知り出席者一同大いに認識を新たにすることが出来ました。  
引き続き懇親会に移り東北の現状におけく地域格差は我々の努力によって解消し得るものであり、若い世代の洛友会々員が自由な構想を画いて活躍する希望を鞏固してくれることを期待し、一方においては大学の近代的発展を喜びながらも我々にとって懐かしいイメージとなつている銀杏並木や赤練

瓦がいつまでも名残りを止めてく  
れることを念じながら和気あいあ  
いのうちに散会しました。

顧 問 荒井源三郎(大4)  
支 部 長 平井寛一郎(大15)  
副支部長 内田英成(昭9)  
評 議 員 谷口正夫(昭4)  
進藤 陽吉(昭6) 石川 清(昭  
7) 山下 実(昭7) 二村 忠元  
(昭15) (幹事) 三国 文治郎  
(昭16) (幹事) 阿輪 鉄男(昭  
21) 三上 謙五(昭21) (幹事)  
安達 哲夫(昭35) (幹事)

### 昭二会同志会記

昭和二年卒業以来毎に会合して  
来ましたが、いつの間にか第八回  
四十年を迎えました。五十四名の  
卒業生の中物故者十六名、最近の  
五年間に三名亡くなられ、京大の  
林君、阪大の熊谷君も名誉教授の  
仲間入りせられることになり、業  
界の第一線に活躍しておられた方  
々も次第に増して、人生の峠を越し  
た感を深く致します。変わらな  
いと言われる京都の周辺も大分変わ  
り、電気教室の様子もすっかり変  
わりましたので月並ながらこの変  
化をさぐろうと五月、十三日をト  
して京都に会合を開きました。集  
るもの二十七名、鳥養先生は公用  
のため東上、御出席御願ひ出来ま  
せんでしたが岡本先生、松田先生

の御出席を得ました。

十二日午前十一時京大に集まり  
林君の案内で関電記念会館を見学  
十二時半南禅寺の南禅院で物故恩  
師、同窓生の供養、その節桑畑君  
の未亡人の御出席を得ました。精  
進料理で中食後南禅寺見物、三時  
にバスで比叡のドライブウエーを  
通り展望台から京都を見おろし奥  
山のドライブウエーに入り、横川  
中堂を見物。六時過ぎ宿舍の雄琴  
温泉雄山荘につきました。両老先  
生は全コースを共にせられその御  
健脚に驚くと共に、その御健勝を  
心から祝福せざるを得ませんでした。

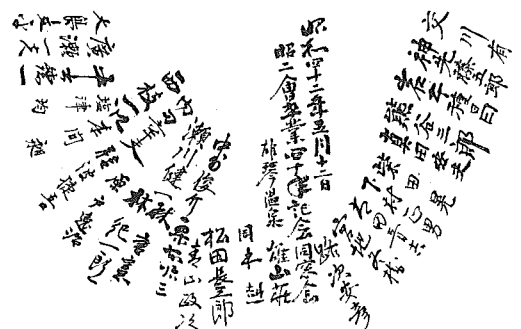
大津絵等の郷土芸能の余興があ  
り宴果てた後、各室に分散したが  
二次会となり十二時に寝たもの  
はないようでした。

十三日は桂離宮拝観希望者と一  
般の二班にわかれ、一般は琵琶湖  
大橋を渡り、名神国道、数日前開  
通した五条バイパスを通過して因  
会議場を見物、最終目的地の八瀬  
鱒之坊に第一班と合流、弥次喜多  
の旅を終わりました。鱒之坊で中  
食、鳥養先生にいただいた記念の  
色紙を分配し三時に散会。

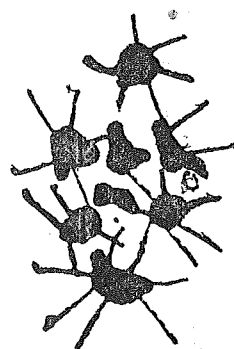
誰言うとなく五年に一度は間が  
長すぎるから有志だけでも毎年集  
ろうという提案が出て来年は「黒  
四」さ来年は「四国」と場所と幹  
事をきめて再会を約したのは年で

### 編 集 後 記

本号は、林重憲先生の退官記念  
行事の記録と共に大森丙氏、真崎  
尚忠氏、古田正康氏の三大先輩、  
更に親子孫の三代にわたり洛友会  
員である上林氏より貴重な原稿を  
頂き会報を飾ることができました。  
前記三氏の記事は東京支部に於  
て前支部長山本三郎氏及び前副支  
部長松尾三郎氏等の御尽力により  
大先輩の懐古談の録音を企画せら  
れ、既に教名の方々の録音記録中  
より選んで頂き、会報にのせて頂  
くため、わざわざ原稿を御送付頂  
いたもので我々後輩のために誠に  
貴重なるお話であります。ここに



しようか。(N生記)



改めて関係各位の御尽力と筆執さ  
れた三先輩に厚く御礼申し上げま  
す。

本部に於ても同様の企画を実行  
して記録に残したいと考えて居り  
ます。次に上林明氏には三代にわ  
たり洛友会員で御尊父の上林一雄  
氏は八十六才の高齢でもまだ豊饒  
として先日総会にも御出席にな  
り御話を承りました。上林明氏は  
最近京阪電鉄常務を御退任になら  
れましたのでそれを機会に現時局  
に最も関心の深い戦争と平和と題  
する感想を頂きました。上林氏の  
貴重なる体験を通じた御感想は誠  
に生きた教訓と言えましょう。  
(山本記)

京都市左京区吉田本町  
京都大学工学部電気工学科教室内  
**洛 友 会**  
事 務 局  
京都市左京区田中大堰町49  
財団法人 応 用 科 学 研 究 所 内  
電 話 京 都 3 5 4 6

# 電気評論復刊について

去る八月七日株式会社「電気評論社」が創設され、編集並びに発行は京都大学電気工学科より新会社に委譲され、電力綜合技術雑誌として全国的視野のもとに新発足することになり、新社長には京都大学名誉教授松田長三郎氏が就任されました。来たる11月より月刊誌として発行の予定で新雑誌の企画編集は全面的に改変されることになりました。異良知、林重憲両氏がそれぞれ東京及び関西方面の編集委員長となり、各専門の権威者を委員として、全国的性格の立派な月刊雑誌発行の予定。

発刊の上は、洛友会員各位の一層の御支援御愛読を御願ひ致します。

憶えば大正4年故青柳栄司博士の提唱により、電気評論が創刊されて以来その揺籃期から成長期にかけて、学界業界に幾多の貢献をなして来たのであったが、太平洋戦争の勃発を機としてその発刊に幾多の経済上の難関がやってきたのであったが、教職員ならびに幾多先輩各位の血のにじむ努力の結果、今日に至った。併しその発刊は経済上ますます難波を来たし遂に関係者相寄り関西電力の芦原社長に

御相談した結果、非常な御厚意と御熱情を示されて前記電気評論社の設立と相なり、社長にこの方面に永年苦心を重ねて来られた松田長三郎名誉教授を推戴することになり目下着々その発刊に努力している。

新会社の住所電話は左記の通り。

株式会社電気評論社

京都市左京区田中大堰町尻番地

(電話京都⑨二五八二)

常務取締役の場俊一(昭十三年卒)